

「子どもの話を聞く場面における教師の習慣的態度」に関する質問項目の作成

○中尾朋子 (大阪大学大学院)
山口洋介 (大阪大学大学院)

三宮真智子 (大阪大学大学院)

キーワード：教師の聞く態度、小学校教員、質問紙調査

問題・目的

教師が子どもの話を「聞く」ことは、子どもにとっての学校生活の基盤を提供する。職場における積極的傾聴態度評価尺度は既に存在するが、カウンセリング理論に基づき、主に大人同士の関わりを前提とした研究に用いられている。

本研究では、複数の子どもを相手とする教師が、カウンセリングとは異なる状況において、必ずしも相談という形式をとらない子どもの話を聞く際の態度について、より現実的に即し、子どものニーズにあった質問項目の作成を試みた。

方 法

調査協力者 兵庫県内の公立小学校に勤務する 3 市 8 校の教員に留置き法による質問紙調査を依頼し、112 名から回答を得られた。回収率は 48.28% であった。回答に不備のあるものを除外した結果、92 名 (男性 39 名、女性 53 名) を分析対象とした。年齢は 22~63 歳であった ($M=38.21$, $SD=12.04$)。有効回答率は 40.28% であった。

調査時期 2017 年 11 月上旬から中旬であった。

調査内容 予備調査として、大学生を対象に、学校の先生に「話してよかった」「話さなければよかった」と感じた高校卒業までのエピソードを自由記述で収集・分類した結果、「受容・安定」「洞察・尊重」「支援・応援」「軽視・回避」「決めつけ・否定」の 5 つのカテゴリが得られた。これらをもとに教師に自己評価を求める 30 項目を作成した。

Table1 「子どもの話を聞く場面における教師の習慣的態度」の因子分析結果

項目	因子負荷量		
	1	2	3
第1因子 軽視・回避傾向 ($\alpha=.821$)			
Q1-2 深刻そうな話しぶりだが、大したことはないと思うことがある	.829	.028	.295
Q1-1 子どもの話は、いつも半信半疑で聞いている	.687	.011	.187
Q1-18 「後で聞かせてほしい」と言っても、そのまま忘れてしまうことがある	.628	-.157	-.342
Q1-22 話を聞きながら、ひどく腹が立つことがある	.591	-.212	-.003
Q1-14 子どもに話しかけられた時に、後回しにしたり、他の先生に話すようにすすめたりすることがある	.550	.025	-.063
Q1-30 子どもが言葉に詰まり黙り込んで、待つことが苦にならない	-.501	-.219	.139
Q1-10 話の続きや結論をせかすことがある	.471	.149	-.056
Q1-28 子どもが納得するまで話を聞けない	.429	.189	-.135
第2因子 感情対処不全傾向 ($\alpha=.782$)			
Q1-3 けんかや行き違いなどの対人トラブルについて聞くと、気が滅入る	.026	.830	.301
Q1-4 子どもが怒りや不満を率直に表出すると戸惑う	.137	.642	.100
Q1-16 感情的になっている子どもを、どうおさめてよいのか分からない	.085	.566	-.174
Q1-9 子どもが自分で考えたり行動したりできるよう主張の整理を手伝っている	.275	-.559	.342
Q1-12 「怒らないから言ってごらん」と言うのが、実際には叱ることがある	-.140	.552	.052
Q1-25 話を聞くために、今している作業を中断するのは、正直おっくうだ	.259	.431	-.048
第3因子 受容・尊重姿勢 ($\alpha=.739$)			
Q1-15 話を聞きながら、その子のよさや特徴を見つけるよう常に気を付けている	-.141	.277	.708
Q1-26 本人にはない視点や考え方を示すようにしている	.336	-.018	.629
Q1-5 過去の自分と同じような悩みを抱えている子どもであっても、その子は自分とは違う心持かもしれないと考えている	.251	-.125	.579
Q1-19 子どもの話に関連する自分の知識や体験をたくさん聞かせている	-.173	.157	.502
Q1-11 どれだけ忙しくても、子どもの話を聞く時間を作っている	-.230	-.155	.465
Q1-17 失敗や悩みなど、言いにくいことを自ら伝えたいことをその都度ほめていく	-.163	.016	.453
Q1-27 子どもが気軽に話しに来られるよう、普段からこまめに声をかけている	-.183	-.294	.380
因子の寄与率 (%)	25.471	8.618	7.113
累積寄与率 (%)	25.471	34.089	41.202
因子間相関	1	.420	-.380
	2		-.430

この質問項目を用い、それぞれ「1. 全くあてはまらない」「2. あてはまらない」「3. あまりあてはまらない」「4. 少しあてはまる」「5. あてはまる」「6. よくあてはまる」の 6 件法で回答を求めた。加えて、積極的傾聴態度評価尺度短縮版 (Kubota et al. 2004, 異 2010) 20 項目に 6 件法で回答を求めた。

結果・考察

項目の評定値について、主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況 (6.54, 2.93, 2.19, 1.75, 1.54, 1.41...) と因子の解釈可能性に基づき、3 因子解を採用した。主因子法・プロマックス回転による因子分析を行い、共通性初期値が .20 に満たない 6 項目を除外した。24 項目について再度因子分析を行った。さらに、1 つの因子に対して .35 以下の負荷量を示した項目を示した 3 項目を除外し、残った 21 項目で再度、因子分析を行った結果、3 つの因子が抽出された (Table1)。

予備調査から得られたカテゴリのうち、主に「軽視・回避」「決めつけ・否定」の項目が第 1 因子にまとまった。話をする子どもではなく、聞く側の教師の立場を優先する態度項目と解釈できる。第 2 因子は「受容・安定」「支援・応援」の逆転項目から構成された。教師にとっての不全感を表す項目がまとまったと考えられる。さらに、第 3 因子は「話してよかった」と感じたエピソードから得られた 3 カテゴリを網羅する態度項目から構成され、個に応じ、安定した受容的・積極的な態度がまとまったと考えられる。

各因子得点は積極的傾聴態度評価尺度の上位因子得点と有意な相関が示された (Table2)。また年齢・教師歴との相関関係は 3 つの因子のいずれにも見出されなかった。子どものニーズに合った聞き方は、年齢や教師歴の長さで自然に養われるものではないことが示唆された。

Table2 積極的傾聴態度尺度との相関係数

	傾聴態度	聴き方	年齢	教師歴
軽視・回避傾向	.65***	-.38***	-.09	-.07
感情対処不全傾向	.41***	-.48***	.03	-.05
受容・尊重姿勢	-.43***	.59***	-.00	.07

*** $p<.001$